

に陥らせ、問題行動発生の「素因」を形成させていく。この状態が続くあるいは合理的に解決できる能力が育っていないところに、問題行動発生の「誘因」が作用すると、ある種の心理機制が働き反社会的行動が発生する。

ところで、反社会的行動をもつ児童生徒の生育歴をたどっていくと、

- 望ましくない養育態度
- 親子関係が疎遠
- 子供の愛情飢餓の状態
- 家庭内での存在感、充実感の不足
- 親子関係の悪化
- 生活全般で心理的に不安定
- 学校での対人関係の不適応、学業不振
- 学校での疎外感、孤立感

となり、これに発生誘因が作用して反社会的行動の発生にいたる。

また、反社会的行動をもつ児童生徒が集団化していくのは、

- 日常生活における疎外感、孤立感
- 集団形成の願望
- 規範逸脱集団の形成
- 集団内での充実感、満足感
- 集団への帰属感の強化

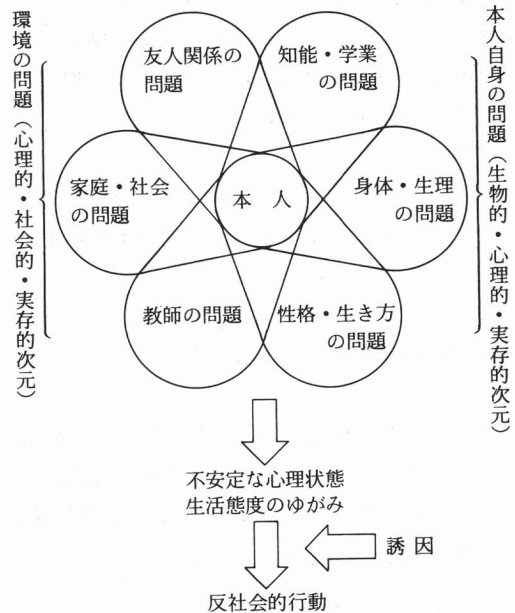
であり、これに発生誘因が作用して集団的な反社会的行動が発生するようになる。

それから反社会的行動がエスカレートしていく過程を調べてみると、意識的ではなく、偶然的行為の成功感、満足感、壮快感が動機づけとなりその反社会的行動が反復される。その過程において、反社会的行動が表面化した場合、周囲の人々の不適切な対応がさらに人間関係を悪化させ、反社会的行動を深化させていく。

### (3) 反社会的行動発生の要因

当教育センター教育相談部は、反社会的行動発生の要因を生物的次元、心理的次元、社会的次元、実存的次元の4つの次元でとらえる試みを行った。

反社会的行動の治療面接の手がかりを得るために、これらを次の図のように具体化した。



上図に含まれる内容は次の通りである。

#### <知能・学業>

知能と学力のアンバランス、学業不振、など

#### <身体・生理>

脳の機能障害、早熟、身体・生理面における不満足感、など

#### <性格・生き方>

心理的不安定、社会的不適応、活動的、外向的、規範逸脱傾向、社会生活に対する考えの甘さ、勉強に対する目的や将来への希望が希薄、親や教師に対する不満、人間不信、など

#### <友人関係>

規範逸脱集団との交遊、いじめられ、など

#### <家庭・社会>

家庭の雰囲気悪さ、両親間の不和、家族間の結合の弱さ、家庭生活全体の秩序のなさやだらしさ、家庭内でのレクリエーションの少なさ、家